寂として

花のある季節に　すこし　酔いましたよ
じっと　耳　澄ますと
ときおり花の心音が　きこえてくる
　そのほとり
み喪(うしな)ってしまった　空の暗闇のむこう
そんな小途が　しいーんと　息をこらし
みえるときがあります
そのとき世界にとり残されて
わたしは　一人
花のように　しずかに犯されていました
そのまま　そのまんま
草の世の　風と波と花の　まにまに
はぐれてしまって久しいお人だったから
あれからの夕べ
ゆれて　傾いて　疲れたこころに　＊
海ゆかば　と　いつまでも
わすれえぬ響き　の
そう　つぶやいて逝った　詩人
もう　いく歳月もかぞえましたね
さくらの花に　よく降るお人でしたから
空をめぐる　お人でしたからね
　父の魂のようでしたか
　母の魂のようでしたか
たなごころの　季節の逢瀬には
だから　その樹の下では
はらはらはらと　すこし　酔いましたな
ふれればまた　醒めてゆく
花冷えの　その肌のとほい温もり
人の世へさきの世へ　さくら一片
つまんでは
ああ　この世は　熱爛のような寂しさだ
つかのまの偲いは
盃に　そっと　呑み干しましようよ
さっき　魂の近所から
還ってきた　ばかりなのに
もう
花を上にたむけ　しんしんと耽っている
すこし　酔いましたか

＊　金子光晴［洗面器］より

川上明日夫（かわかみあすお）

詩人

1940年満州国（現中国）に生まれる。東京測量専門学校卒。福井市在住。
20代はじめに「荒地派」の鮎川信夫に出あい私淑。ここから詩を書き始める。
1968年、福井の詩人、広部英一、岡崎純、南信雄らと「定住者文学の確立」を掲げて詩誌「木立ち」を創刊。ふくい叙情派・北陸叙情派とよばれ、その独特の叙情が高く評価されて現在に至る。2004年には福井県文化賞を、2011年には福井県政功労者表彰（教育文化）を受賞する。

主な詩集　1992年『白くさみしい一編の旅館』福井県文化芸術賞
　　1998年『蜻蛉座』第39回中日詩賞・第49回H氏賞候補
　　2004年『夕陽魂』第16回冨田砕花賞
　　2011年『現代詩文庫192　川上明日夫詩集』思潮社より刊行。
　　2013年『往還草』第6回更科源蔵文学賞

所属　日本文芸家協会、日本現代詩人会、日本詩人クラブ、福井県詩人懇話会会員、日本詩歌文学館評議委員。

詩誌　「木立ち」編集発行・「歴程」同人・大阪文学学校講師。

㈱川上測量コンサルタント　代表取締役会長